



Education, Healthy & Welfare

学びあい、健康で、人にやさしいまち



若い世代にも夢をかなえる楽しさを 感じてほしいと思つています。

新潟県女子野球連盟 会長

頓所 理加



頓所 私は約20年前に豊栄にお嫁にきました。来たときには、埼玉

出身なので、なかなか新潟になじむことができず、埼玉に帰りたいという思いが自分の中にありました。

しかし、それと同時にこの土地を好きになりたいという思いもあり、子どもを小学校に上げるタイミングで、もう一回この町をよく見て、この町を好きになりたいと思いました。

今から14年程前になりますが、この土地で私が野球をすることができたなら、それによって地域の役に立つことができたならこの町を好きになり私がここに残留の意味もできるのではないかと思います。「野球をしたんです」と家族に言つて少年野球のコーチを始めました。

豊栄では私が初の女性のコーチで、最初のころは周りの目も温かいものではなく「女性がグラウンドに入つている」という声が聞こえたりして寂しい思いをすることもありました。ここで弱音を吐いて辞めました。ところが、ここで女の子が続けられない、笑顔でできたら女の子たちも続けられるのではないかと、思い続け

てきました。

その結果、少しずつ周りの男性陣も理解、応援してくれるようになり、また私がいたのでチームには女の子の選手が入るようになってきました。そして女の子だけで野球をさせてあげたいと思うようになり、それが今から10年前になります。

女の子だけを集めて野球をした、ということに理解の声が集まるようになり、フレンドシップマッチという、学童の女の子の選手を集めた大会を始めました。スタートは木崎球場から始まったものですが、今はハードオフエコスタジアムで行えるようにまでなりました。フレンドシップマッチだけではなく中学生以上の女子のクラブチームができた

り、開志学園ができたりと、理解が少しずつ広まってきた。女の子たちの夢を少しずつかなえてもらえ、10年になつたのではないかと思います。女性に対しての理解も、10年前から比べると変わってきて、頑張る女性を応援してくれる空気がなつたと肌で感じます。

——野球がどんどん発展してきているのですけれども、今後の10年くらいの展望というのはどのようなものでしょうか

頓所 実はこの10年で現場を少しでも早く若い世代に譲りたいと思つています。女子野球を経験した子たちが二十歳になりかけているところなので、その子たちに早い段階で現場を譲つて新たな視点で女子野球を広めてほしい。女子ゴルフとか女子サッカー、女子バレーという言い方がよくされますが、そこに女子野球が加わつたらいいなと思つています。

今は女子ゴルフの方が男子ゴルフより人気があったり女子バレーの方が男子バレーよりも面白いよねという人がいますが、女子野球の方はまだまだ少ないです。女子野球というものの面白さ、素晴らしさをもっと伝わり、抽象的ではあります。女子野球が当たり前になることが今後10年間の夢です。

そしてその夢を私たちが全部かなえてしまうのではなく、若い世代に引き継いで長い目で実現してい

きたいと思つています。私たちも夢を追いかけてきたことが楽しかったので、若い世代にも夢をかなえる楽しさを感じてほしいと思つています。

——今北区の課題で、若い人が区外へ出ていってしまうと。例えば就職の問題とか、1回出るとはあっても戻りませんが、戻つてき

て活躍してほしいというのがあるのです。私も、北区を選んでよかったと思つています。地域のみんなでのびのびと子どもたちを育ててあげられることは、子どもを育てる環境として理想的だと思つています。

ただそれは私が埼玉を知っているだけ、残念ながら北区しか知らないところのよさにはなかなか気づかないと思つています。地域のみんなで育ててもらえることで、子どもたちも地域の人が応援してくれるし

自分も役に立つことができるといふ自信を持つことができ、地域の人に感謝する気持ちが生まれ、ここに残りたいと思つのではないでしょ

うか。

また私は結婚後の同居のよさも伝えたいと思つています。同居はよくないもの、お姑さんは嫌なものという先人観が全国どこにでもありますが、でも同居しているからこそ子どもたちがたくさんの人の愛情を受けられることができます。私が一人落ち込んでいても、ばあちゃんや笑つていてくれれば子どもにも圧をかけられることもない。じいちゃんとかあちゃんも年を取つてきて、孫を見ることもよくわかります。

私は新潟に来てこの土地で赤ちゃんを産んで、お母さんとして生きてきてよかったと素直に思つています。少子化になつていて周りを

見たときに、子育てのしやすい土地には人が戻つてくると思つています。ここで生まれ育つた人にもわかるくらい、ここで産んで育てるよさを伝えられるといいと思つています。

子育てのしやすい土地には人が戻つてくると思つています。ここで生まれ育つた人にもわかるくらい、ここで産んで育てるよさを伝えられるといいと思つています。

野球でコミュニティを作っていくような企画を これからやってみようかなと思つています。

Satou Kazuya

新潟医療福祉大学 野球部監督
佐藤 和也



——佐藤さんの北区での野球との関わりについて教えてください。

佐藤 新潟明訓高校から新潟医療福祉大学に来たことは大きいことでした。29年間明訓高校にいて、1回しかない人生だから新しいことにチャレンジするのもいいかなという思いと、自分の教え子に道を譲り監督をさせてあげたいという気持ちがありました。節目に選手たちも奮起してくれて甲子園にも出ることができました。不思議なもので、自分で身を引こうと思つたら大学から野球を本格的にやりたいという話を聞き、一からという思いで手を挙げ目指す大学野球についてプレゼンテーションも行いました。そして大学野球に携わることになったのです。

——高校野球と大学野球について、どのような印象をお持ちですか。

佐藤 今、新潟医療福祉大学では4学年で160名もの部員がいます。いろいろな名門校からも来るようになってきました。高校とは全然違うし難しさもあります。面白味も違うところにあると感じています。高校と比較して選手との関係

性が少し違う気がします。

今までは県内の子は本格的に大学野球をやるといつたら県外に出なければいけなかった。それが県内の球児たちの選択肢が増え、昨年プロ野球に二期生が入りました。レベルの高い野球が県内でできることは非常に意味が大きいと思つていますし、新しいムーブメントを起せたと思っています。

——目に見えない部分の野球を大事にされていると聞きましたが。

佐藤 例えば一つの集団があつて、その集団の中でそれぞれが居心地よく楽しくもつとやりたいという気持ちを持つて進むのと、みんながただひたすら競争して上手い者はよく、下手な者はだめ、チームが負けたらボロボロみたいなムードの中でやるのでは全然違います。目に見えないけれど一番大切なのはムードとか、簡単に言えば自分がやつてい



キャッチボール教室

ら。そこでいろいろな仕掛けを作りながら、選手一人ひとりのやる気とか達成感、将来に向けて生きていく知恵、力というものをつけてあげられればいいなと思つています。

——大学野球を通して北区へ期待することや学生へ期待することはどのようなことですか。

佐藤 今後はみんなが地元へ帰るのではなく、野球がこちらでもできるような受け皿のものがあればいい。例えば北区に社会人野球ができて、野球の選手を優先的に採用する。新潟県で硬式の社会人野球チームは1チームだけで、そこも新潟県が野球界では弱い点で

す。

硬式は大リーグにまでずつとつながっていく野球です。高校の教え子は大学野球を終えると軟式野球がある会社に就職するため、硬式のチームが今後できると部員たちがそのまま新潟に根づくことも期待できます。

また医療系の大学なので、ここから育つて指導者や、より故障の少ない野球の動き、動作について詳しい人間を輩出していくことも期待しています。授業の二環として学生が子どもたちに故障しないキャッチボール教室を開催するなど、少しずつ前に進んでいます。

——少年野球の子どもたち、将来を担う子どもたちに向けて、学ぶ環境についてご意見を聞かせてください。

佐藤 小学生の指導が一番おつかなという話があります。声を出さないとかだめだとか。長時間練習するとか。子どもたちが少なくなつていく中で野球をやってくれること自体が宝物です。一人ひとりを大事にしないといけない。もつと子どもたちが野球を好きになるような指導

者を育てようと、指導者向けの講習会に講師として行つています。

今、野球界がどういう現状にあるか、今後何をしたいかという現状に向う勉強をしないと、野球全体が向う上していかない。

そして原点に帰れば、野球は地域のコミュニティの中にあつたスポーツです。昔はコミュニティが先にあつて、近所のお兄ちゃんたちが打ちやすいボールを投げてくれるとか、遊びのツールとして野球があつた。野球で逆にコミュニティを作っていくような企画をこれから少しやってみようかなと思つています。

また全国の公園でボール遊びが禁止になつていくところがあります。子どもたちに野球、サッカーを思い切りやらせてあげることができない公園が増えていきます。それこそ北區は先んじてここについては可というのを作っておくべきです。大人が子どもたちを育てていくムードを取り戻すことで、少子化に歯止めにかける地域ができると思うのです。そのお手伝いも大学の野球部がやつていかなければいけないことかなと思つています。

新潟と都会、どちらを選択してもいいし、 選択できるようなるといい。

ダンスサークル With Step 代表
Wakao Keiko
若尾 恵子



——お生まれは新潟ではないとい
うことですが、縁ができたいき
つを教えてください。

若尾 生まれてから小学校まで東
京と札幌におりました。現在、実
家は神奈川県にあり、高校・大学・就
職は東京で、ほぼ関東圏におりま
した。ただ両親はどちらも、新潟の
学校に通っていたことがあります。
私は夫の転勤を機に新潟と縁がで
きました。

新潟に住み始めたころは、関屋
におりました。冬車を走らせてい
ると田んぼに白鳥が見えるのにだ
れも驚かない様子でしたが、そのこ
とに私はびっくりしました。福島
潟の自然は稀有なものなのに、みな
さん慣れて普通だと思っている。当
時は水の駅「ビュー福島潟」がで
きたころで、福島潟の自然に詳しい方
がおられました。お話を伺いな
ら福島潟によく足を運ぶようにな
り、近くに中古の家を見つけたので
買って住み始めました。その後子ど
もが生まれ、転勤族だった夫も仕
事を変えて北区で暮らすことにし
たのです。いわゆるイターンでした。
——ダンスサークルをされても

15年ほどになりますか。

若尾 平成10年ころ、早通児童セ
ンターで行われていた親子サークル
「With Step」に入りました。このサ
ークルでは「母親が当番制で子ども
たちを見守り他の母親はインスト
ラクターと共に体操ができる」とい
うもので、そこで少しインストラク
ターをしていました。数年後、子ど
もたちが就園した後には子ども向け
運動サークルをやつてほしいと言わ
れ2001年に「With Step Kids」
として始めました。当初は基本的
な運動だけをやっていましたが、いつ
の間にかダンスサークルになってい
きました。それが「With Step Kids」
の始まりです。

今は公民館の大講

堂などで、4歳から大
学生まで各学年の子
どもたちが一緒に集
まって活動していま
す。それぞれの体力
やダンスの上手さは
異なりますが、基本
的に同じ目的を持っ
て一緒に踊り、同じイ
ベントに参加していま



福島潟自然文化祭での発表会

す。中学生になるとほとんどの子
が部活動に入り、帰宅が遅くなり
ますが、遅れてきても良いことにし
ているので続ける子が多いです。

ダンスと真剣に向き合う子もい
れば、おしゃべりしている子もいま
すが、みんな一緒にゆるやかに取り
組んでいて、踊れないからやめなさ
いという雰囲気がないことも続け
やすい理由だと思います。

今は小さい頃からテニスやサツ
カー、水泳など特定のスポーツに専
念し、とても高いレベルになる子も
あれば、まったく運動せず身体の中
かし方が分からないような子もい
て両極端だと思えますね。東京よ
り新潟では公園で遊ぶ

子どもたちの姿が少な
いのは気になります。

——サークルに所属し
ていた最年長の子が東
京に出られたというこ
とですが、子どもたち
にこの地域に誇りを
もってもらえるように、
また帰ってきて暮らし
たいと思ってもらうため
の新潟の魅力は何だと

思いますか。

若尾 まずはお米がおいしいこと、
それから福島潟など自然の景色が
素晴らしいことに気づいてほしいで
す。でもこういうことは新潟にずつ
といても分かりにくいものです。私
の子どもも葛塚東小学校の4階か
ら見える景色について感想を聞い
ても「普通」と言っていました。私
には普通ではなく素晴らしいと思
えます。それは東京などの地域
を知っているからです。違いを身体
験しないと、なかなかその貴重さが
分からないのだと思います。

ある時市外から来た知人に豊
栄の人は「平たく住んでいるね」と
言われました。マンションが林立し
ていてそこに縦に重なるように住
む都会とは違うということ。私
は災害の時にも、人口の密集する都
会では上からガラスが降ってきて、
寝る場所や食べ物、排泄などすべて
に困ると思います。新潟であれば
人があふれかえることもないで
しょう。日本は災害の多い国なの
で、そういう時に家族を守りやすい
土地であることは大きなメリット
ではないでしょうか。

確かに都会と比べると電車の本
数やバス路線などで不便なところ
もありますが、便利であれば全て
が良いわけでもありません。交通
手段から疎遠な地域でこそ成り
立つ、その土地独自の文化というの
もあると思います。南浜や松浜な
ど、その地域ならではの暮らしと文
化がある。一方でその地域にない専
門性を求めて、例えばダンスを極め
るために新潟市中心部のダンス教
室に通ったり、東京に出る人も増
えてきました。双方の良し悪しを
理解したうえで、どちらを選択し
てもいいし選択できるようなると
いいと思います。ただ成人してく
ら就職するための選択肢は、もっと
増えるといいですね。

私たちのダンスサークルが今後ど
のような形になっていくかは模索中
です。専門的にしていくこともでき
ますが、勉強も頑張るし部活も頑
張るけどダンスもやめなれないとい
う子どもたちがいてくれます。そのよ
うな子どもたちのために、少し緩いス
タンスでサークルを維持し続けるこ
とは、子どもたちの生きる幅を広
げる意味で良いかもしれません。

競争し合う、面倒を見る、頼る、 コミュニケーションがとれる場は大事。

Izumi Chikei

泉
智慶

北海道練武館館長



——北区に剣道を根付かせ、長く指導に携わってこられました。振り返ってみていかがですか。

泉 合併により市政が変わったからといって、私どものやっている剣道には決して大きな変化はありませんでした。しかし合併前は、体育協会から大会に対して助成金があったのです。新潟市と合併して、日本体育協会の加盟団体以外に対してはそういう助成金は一切出ませんという枠組みになってしまい、子どもたちを大会に連れて行くときの助成金がなくなってしまいました。そういう点ではあまりよくないですが、いろいろと枠組みが変わってきたと思います。

私が剣道を教え始めてから今年で35年になります。前の道場は仲間と造った小屋みたいなものだったのです。トタン張りだから冬は寒くて夏は暑かった。だけどそのときにやっていた連中もオヤジになつて、当時やったことをすごく懐かしがるというか、こういうことがあって面白かったねという言い方をします。そのときに支えてくれた先輩たちは、好意的なものの考え

方をもっていたし、地域をとて大いにしていた。地域で子どもを育てるのだという、その中に剣道が噛み合ったからやれたのだと思います。

以前は若かったので今やっている道場のほかに、葛塚と早通の道場にも週1回通っていました。現在私の道場では暖房を点けていますが、当時は冬場に暖房のない寒い道場の練習だったので、5人いるかどうかの練習生で3月の春先まで残る子は限られました。そのときにやっていた子どもたちがこの前世界選手権に出たのです。

——剣道の指導をとおして、子どもたちの変化などありますか。



泉 今の子どもは昔と比べて体の構造や使い方が変わってきました。昔は常に外での遊びでしたが、今は遊び方自体も変わってきて体を使う遊びができない子どもが増えたと思います。そして今の子どもは集中して聞く力がなくなっています。うちの道場の場合はやる気があつて来ているからまた聞いている方ですよ。

区制施行云々ではなくて、子どもたちが変わってきたと実感しています。近年は便利になって、スマホを見れば情報も入るわけでしょう。勉強するとか学習というのは、調べればいくらでも調べられるというこの時代。誰にも邪魔されず自分だけの成り立ちみたいなものが、今の子どもたちが生まれたときからあるので、段々人を頼らなくなっている。苦労しなくていいかもしれない。苦勞しなくていいものが薄れてきているのかなという気はしますね。

うちの道場では、練習納めで道場生とその親御さんを80人くらい集めて食事会をやるのです。子ども

もたちに自由にやらせて様子を見ているのです。小さい子どもから中学生、高校生、大学生といますよね。嬉しいのは、上の者が下の者の面倒を見る姿勢があることです。競争し合う、面倒を見る、頼るということは家庭の中では少なくなってきたのですが、兄弟や地域に関係なく小さい子を抱き上げたりにして面倒を見る光景を見ていたときに、これがうちの財産なのだということをその食事会でとても感じるのです。



剣道演舞会の様子

そのことを親御さんにも言うのです。子どもは一人では何も学習しない。人と接する、話す、何かして

もらうとかいろいろな人間関係の中で本人が初めて身を以て体験することがないと、人間的な温かさみたいなものは出てこないよねと。子どもが少くない時代において、そういったコミュニケーションがとれる場は大切だと思つたので、これからも続けていきたいと思つています。

——北区で生活されてきて今後の課題についてお聞かせください。

泉 これから10年を展望したときの課題というのは、地域の中の交流でしようね。地域の人たちが一堂に会して「○○をやるぞ」というイベントは部分的にはありますが、それが二つにまとまるということが今はないでしょう。やはり各地域でそのようなことを抱えているのだと思います。木崎の場合は、お年寄りのグループの集まり、若者のグループの集まり、子ども育成会の集まりとか、その必要性があるから皆さん続けていらつしゃるけれども、そういうことがなかなかできにくくなるのかなと。行政としてそういったものを見越して、どういった手を打つていくか、ということなのかなと思いますね。

スポーツ振興について

北区体育協会 会長
横山 山人
Yokoyama Yamato



柳(本名・小柳亮太)改め豊山関が誕生した事。多勢の人から大きな声援を受け立派な相撲力士になつて頂きたいと思っております。

次に北区体育協会(区体協)についてです。合併を目前にして当時の小黒会長は「横さん、一旦市体協を解散して合併後、新たに区体協をたちあげようや」との考え方に当時スポーツ少年団(スポ少)本部長だった私も賛成し、遅れる事なく行動をしました。

今までの10年で記憶に残っている事は、トキめき新潟国体柔道会場での裏方のお手伝いです。「北区国体応援団」を立ち上げ、多くのボランティアの方々に参加し、それぞれの分野で企画を立て本番に臨みました。

私の担当は来場される方々への飲み物を提供する事。県内外から訪れる多くの方々から「ありがとう!」「うれしい!」等感謝の言葉をたくさん頂きました。翌年の開催地の視察団からは「凄いわこー!」「うちでこんな事できるのかな?」等の声がありいい気分でした。国体でのお手伝いは初めて、でもこれが最初で最後かな?などと思いつながらの三日間でした。他にも色々ありました。が、なんでも本気でやれば楽しくなると思えました。

更に突然相撲界入りをした小柳(本名・小柳亮太)改め豊山関が誕生した事。多勢の人から大きな声援を受け立派な相撲力士になつて頂きたいと思っております。

合併後区体協の参加団体としてスポ少も発足し、ジュニア育成の方向をしっかりと理解して頂き、特に問題は起きなかつたのですが、体協内でのスポーツ振興の考え方の違いや運営方法の違い等で意見が合わなかつたり、人事面での地域バランスに神経を使つたりと事務局も大変だつたと思います。違いは徐々に解消され現在ではつの事業遂行の為に全体で力を合わせて共に汗を流すという形になっております。



平成29年8月の新発田巡業

事をジュニア世代に託すという事を今以上に考え、行動に移して頂ければ大変嬉しく思います。近年子供達の運動力も低下してきているとも聞き及んでおります。基礎体力の向上の為の指導方法も考えていく必要があるのかとも考えます。スポーツ環境の面では指導者や施設はまあまあといった所だと思えますが、スポーツ人口から比較すると充実しているとは言いい切れなことも思います。

利用頻度の少ない施設や老朽化した施設の改修又は建て替えも必要と思います。特に木崎野球場は野球関係者もよく言わない老朽化した中途半端な施設です。だから使用頻度も低いと言えます。大改修をして野球のみならず多目的に多くの競技での活用ができる施設になつてほしいと願っております。

松浜中学校女子バスケ部の軌跡

松浜中学校 教諭
吉田 知訓
Yoshida Tomomichi



会優勝を果たしました。28年度より高澤氏から私に指導が代わりました。前年のメンバーが半分以上残っており、前年度果たせなかった全国出場を目指し、県新人大会で2位、県外遠征で強豪校を破るなど着実に力をつけ、夏の新潟東地区大会に臨みました。

- 1、松浜中学校女子バスケ部の最近5年の成績
- 平成24年 県大会出場
 - 平成25年 県大会出場
 - 平成26年 県大会4位
 - 平成27年 県大会優勝
 - 平成28年 県大会優勝
- 北信越大会ベスト8
- 平成27年 北信越大会3位
 - 平成28年 北信越大会ベスト8
- また自分一人の指導ではなく、多くの方に選手の指導をお願いし、選手のやる気を引き出す工夫をしています。
- 4、北区の良さについて
- バスケットボールについては非常に熱心な地区で、年間3回の北区主催大会の開催など支援体制が非常に整っています。この体制が北区のバスケットボールの向上につながっていると感じています。

しかし決勝でポイントガードが大怪我をし、残りの大会に出場できなくなりました。ところが全員が協力し合い、怪我した選手の分を補い、戦力ダウンを感じさせない戦いで県大会を2連覇することができました。

3、今後の取組

2連覇の経験から選手のやる気と自主性を活かす指導が必要であると考え、練習内容や声かけなどの指導法の改善を図りました。

「松浜の昔が知りたい」——その思いが 北区全体を見渡すきっかけになりました。

Terayama Tomoko

北宝隊／北新潟商工振興会
寺山 知子



——この10年を振り返っていかがですか？

寺山 今から10年前というと、北宝隊という団体ができた年です。当時の豊栄博物館が「北区の貴重なお宝を探索したり、地域のことをもっと勉強しませんか？」と募集をしており、それを受けて集まった区民の有志グループです。平成19年度から3年間で「北区のお宝ものがたり」「北区のお宝マップ」「北区の紹介DVD」を作成しました。当時の私は未知の場所に不安を感じながらも「松浜の昔が知りたい」と思い切つて参加しました。それが北区全体を見渡すようになったきっかけだと思っています。

——北区自治協議会はどうですか？

寺山 私が自治協議会に4年間お世話になった際、子育て世代のお母さんたちにアンケートをしてから直接会い、いろいろな意見を聞いたことがあります。児童センターや支援センター等、足を運んだその場所がもっと使い勝手が良くなると、子育てをもっと楽しくできるのに……という希望と願いました。お弁当を持参して子どもとゆっ

くり過ごしたいのに、センターではご飯を食べることができず、昼前に帰らなくてはならないこと。北区でも病児保育室が欲しいね！という話から、子ども病気の病気がそうだけど、自分たちが体調を崩したときは子どもを預けられる場所がなく、限界まで我慢してしまうこと。本日は検診にも行きたいけど子どもを見てくれる人がいないから行けないこと。いろんな支援があるけど、実際はなかなか預かってもらえないこと……。子育てについてどうい

う支援がいいのかというのは、実際に子育てをしている本人達に会って現状を聞かないとわからないものだ、と、しみじみ感じました。

——松浜の市はいかがですか。平均年齢が上がっているから、新しく買いに来る人を増やしていかないといけないですね。

寺山 昨年は北新潟商工振興会が創立50周年、松浜市場が開設250周年の記念の年で、協力して「こらっせ松浜市」というお祭りを市場でやってみました。想像以上に大勢の方が来てくれて、市場の人も、こんなに人が大勢来たのは何十年ぶりだろうね！と喜んでく

れましたよ。その後も、「今までは松浜市が分からなかったけど、来てみたら面白かったし安かったし、意外といいね」と、思いがけず親子連れがたくさん来てくれるのです。このような流れは地域活性化にとっても効果的だと思います。



こらっせ松浜市

——大学生などは増えていますか。

寺山 いまや、松浜の様々なイベントに学生ボランティアはなくてはならない存在ですね。特に夏の「ござれや花火」の時は、当日の大事な戦力となつてくれます。本町商店街の「青空バザール」の時は、はまなす学会と一緒、新潟医療福祉大学のレクア（ドット）コム部が鮭のちゃんちゃん焼きを作つて売つたり、子どもたちを遊ばせる場所を作ります。終わつたらみんなでおにぎりや、がら汁を食べておしゃべりをしながら

楽しくやらせてもらっています。そういう点で北区では、学生たちの力は大きいですね。

——盆踊り太鼓はどのような活動で、今どのような状況ですか。

寺山 松浜盆踊り太鼓は、地域に根付いている郷土芸能のひとつです。踊り子さんに気持ちよく踊ってもらおう太鼓です。習う方も楽しんでみながら教えてもらっているようです。披露する場がたくさんあり、郷土芸能発表会、北区博物館まつり。地域の福祉施設では年配の方に喜んでもらえます。お盆の時期や地域のお祭りでは、大勢の人が集まつて、二重三重の輪になりとても賑やかです。

松浜中学校では毎年運動会のファイナーレに全校生徒で踊ります。若いときに芸能に触れる機会があることが今も松浜盆踊り太鼓が続いている一つの鍵になっていると思います。

松浜は他にも松浜小唄や松浜音頭などがあります。昔、松浜芸者がいたころの名残でしょうか。私は松浜小唄を中学の頃に教わったおぼえがあり、歌詞がとても心に残っていて、今でも歌つて踊れます。

でも同級生の主人は全く覚えてないというのです。不思議です。中学校で教えている盆踊りもみんなではなくても、何人かが好きになつてくれればいいなと思つています。地域にこういう踊りがあるんだということ、地域を知るきっかけにもなりますね。

——北区全体の一体感というのは、この10年を見てどうですか。

寺山 私は北宝隊に入つていますから葛塚、木崎、いろいろなところから大勢知り合いますので、一体感はとても感じます。しかし、多く人は一体感というのは多分ピンときていないのではないかと思います。今年始まつた北区の運動会も、誰がどう参加するか分からない。あ

ることは分かつてもまったく身近に感じないというのが現状です。北区で特産化を進めている、シルクスイートという品種のさつまいも「しるきーも」については、あれだけ大々的に宣伝しておしゃれなポスターもあるというのに、せつかくいいものを作り上げたのであれば、広報活動を今以上にしっかり行い、北区全体に周知していけるようにしなければなりません。

私にとつてこの10年は、北区フィルハーモニー管弦楽団とともにありました。

旧豊栄市に転入した平成7年当時、市内には演奏会が開催できないホールがありませんでした。しかし新潟市との合併に伴い北区文化会館の建設計画が持ち上がり、私もこれに呼応して年一回アマチュアオーケストラ演奏会を開催する会に参加し、機運を高めてまいりました。

このような活動を続けるうちに北区文化会館を拠点とした市民オーケストラを立ち上げたい、という思いが徐々に強まってまいりました。過去には自身もオーケストラで演奏した経験があったため、演奏する楽しさやオーケストラの豊かな響きを再びこの地で味わいたかったのです。そこで1年ほど企画書を練った後、北区文化会館が開館した翌日に事務局を訪ね北フィルの設立を打診しました。指定管理者側も地域が創るミュージカルを構想中とのことで、「一緒にがんばりましょう」という事になりました。しかしながらオーケストラの演



北区文化会館での演奏会

奏に必要なティンパニなどの大型楽器や備品類の多くは北区文化会館への納入計画が無く、仕方なく中古品など方々に当たりましたがいずれも上手くいきませんでした。オーケストラは10種類以上の楽器と70名ほどの団員が必要となりますので、それらの準備、募集も容易ではありませんでした。

このような状況を当時の北区長に相談したところ地域性や公共性のある取組であり、ぜひ区としても応援させてもらいたいとの快諾を得て一気に話が前に進みだしたのを覚えています。区は必要な備品の購入やPRなどを、指定管理者は練習会場の確保や指導者の紹介などを、そして私は団員の募集や演奏計画などを担当し、夢の実現に向けて協働体制を取ることが出来たのです。

それから1年後、私たちの夢は真新しい北区文化会館のホールに鳴り響きました。モーツァルト作曲歌劇「魔笛」序曲です。調和のとれた最初の和音は、市民、事業者、行政がそれぞれの役割を果たし、結果を生み出した協働の音に聞こえました。

北区フィルハーモニー管弦楽団協働の和音

北区フィルハーモニー管弦楽団 前団長

Wakao Akihiro 若尾 明弘



倉澤 桃子 Kurasawa Momoko

マリンバ・打楽器奏者



文化会館へGO!

新潟に拠点を移し9年。実家の住所はいつの間にか「北区」に変わっております。

私にとつてこの9年は、感謝の一言に尽きます。

クラシックというジャンルで音楽活動をしている私は元々新潟で活動をしていなかった為、帰郷後は全く仕事がありませんでした。そんな中、手を差し伸べてくださったのが母のご友人方。演奏の機会やアドバイス、また演奏者との引き合わせなど様々な出会いが今の活動に繋がっています。人の繋がりはなんと素晴らしい！本当に感謝いたします。

さらに感謝すべきは北区文化会館。2016、17年と会館主催の演奏会、5年前からのアウトリーチ（学校や施設などでの出張コンサート）、また今年度はアウトリーチと併せホールでの「ワンコイン」縁コンサート」など、様々な企画に声を掛けて頂いております。

演奏家という仕事は聴衆、演奏場所、主催スタッフ、いずれが欠けても成り立ちません。その点この北区は温かいお客様、次々と企画を打ち出すパワーのある方々、文化会館などの演奏場所、とても環境に恵まれていると感じます。

そして演奏者の最大の味方が演奏場所の「響き」。文化会館のホー



ルは私の演奏するマリンバ（大きな木琴の様な楽器）の響きを最大限に生かしてくれれます。なんとも気持ちが良い。楽器や合唱をされている方は度体験されてみてはいかがでしょうか？

演奏の仕事と併せて生業とするのが楽器指導。マリンバ教室、高校校吹奏楽部指導のほか2015年に発足した北区ジュニア吹奏楽団。このジュニア吹奏楽団で教える立場でありながら様々な事を学ばれます。発足当初団員は5名ほど。団員を増やすために魅力のある団にするにはどうしたら良いか。限られたレッスン回数の中での音楽の楽しさと厳しさの伝え方などまだまだ手探り。そんな中、演奏会で素晴らしい音を聴かせてくれる瞬間はこの上なく嬉しい。今では30名ほどの吹奏楽団、これからの発展を願つて。

楽器に興味のある子ども達、北区文化会館へGO!

マーチングバンドの現場

ジュニアマーチングバンドとよさか指導者

Fujita Noriko **藤田 典子**



よつとよつつきにくく感じる方もいらつしやうたようです。
その頃の私は市民として応援はしていたものの、マーチング指導に
関わることになるのは想像もして
いませんでした。その後、二校のマー
チングバンドが「一緒に」ジュニアマ
ーチングバンドとよさか」としての
活動がスタートしました。

私はマーチングは未経験ではあ
りましたが、楽器の演奏経験があ
るということ、その2年後からサ
ポート役として指導に関わること
になりました。以来14年間指導者
として子どもたちと楽しく活動を
しています。

学校を離れての自主運営は多く
の苦勞もありましたが、ここまでや
つてこれたのは音楽を楽しみたい
という子どもたちの熱い気持ちと、
保護者の方の協力、そして地域の
皆さんの応援があったからです。大
好きな音楽を大好きな仲間と作
り上げることができるのは本当に
楽しいものです。

新潟市に合併してからは、演奏
の場が広がり新潟市全域で活動
するようになりました。また演奏
依頼も様々な形であり、新潟東港
での外国クルーズ船入港時の演奏
など普段経験できない場所や機会
が増えました。

その他、東京ディズニーリゾート

でも演奏し、子どもたちと共に貴
重な経験をさせていただいていま
す。
これから子どもたちとともに
音楽に対して素直に楽しく元気に
活動していきたいと思っています。
最近では、マーチングバンドOB・
OGも演奏に参加し、一緒に音楽を
楽しんでいきます。地域の方をはじ
め、たくさんの方に演奏を聴いてい
ただければ幸いです。
最後に、子どもたちには自分の
やりたいことを意志を持ってでき
る人であつてほしいと思っています。
やりたいことを楽しく自信をもつ
てやり、親御さんもそんな姿を温
かく見守り応援してほしいです。
そうすることで子どもは大きく成
長できるのではないのでしょうか。



葛塚まつりでの演奏風景

音楽活動を通じ 地域への貢献を目指す

公民館まつり実行委員長

Ichishima Masashi **市嶋 正志**



この演奏会は、母の叔父である
故山田正興(やまだまさとも)さん
(新潟師範学校学部長)が葛塚中
学校の校歌を二度も作つた話を思
い出し、若輩者ではありますが「母
の故郷である豊栄の地」に何かし
らの貢献をしようとする音楽活動
をずっと続けています。現在計画され
ている北区役所及び豊栄地区公民
館の新築を機に、私も参画する公
民館まつりの更なる発展を期待す
るものです。

この地は以前北蒲原地区の中心
にあり、新潟でもない新発田でも
ない、都市的な存在ゆえに独特な
文化を育んで来たと思います。こ
の先も葛塚地方特有の言葉ととも
に豊栄の音楽を通じた文化がま
ます発展していくことを祈ってい
ます。

私にとつてこの10年での大きな
出来事は、平成21年の暮れに母が
他界したこと、年が改まった平成
22年6月に、私たちにとつて待望の
北区文化会館が完成したこと
です。
そして、そこを根城に熱帯エレキ
楽団の活動の再開と定期無料演
奏会をスタートしました。

次いで平成23年3月11日には東
日本大震災の発生。その直後では
ありましたが「TOYOSAKA Big
Band」とよさかビッグバン
ド」が発足し、以後北区文化会館
ホールにて周年記念演奏会を開催
しています。



Big Band 演奏風景



新潟東港クルーズ船歓迎会にて

豊栄市時代は葛塚東小学校、葛
塚小学校が学校ごとに全国大会
を目指して活動をしていました。
当時は「マーチング」というと、身近
に応援して下さる方もいれば、ち



職員のかちゃん、ゆかりちゃん、それから全ての職員さん、毎週遠くから指導に来てくれた台本・演出指導の笹部さん、いつでもそばでいいいにお芝居を指導してくれた演出の三浦真央ちゃん、真由ちゃん、出演者のみんな、舞台に関わってくれたすべての皆さん、本当にありがとうございます。

そして舞台本番、自分のできかぎりの精一杯をやったつもりです。舞台が終わるとたくさんのお客様に「感動したよ」と言ってもらえました。泣いてくれてる人もいました。こんなすてきな舞台を経験できて本当に幸せでした。私も4回公演の最後まで楽しもうと思っていたのですが、4回目の公演のカーテンコールで、もうこれで終わらだと思ったら悲しくて涙が止まらなくなりました。

平成29年1月に学校の図書館の先生から、北区文化会館で行われる「二日月」という演劇のオーディションの案内を渡されて「受けてみたら」と言われました。私もお芝居に興味があったので家に帰って話したら、お父さんに「主役は小学校高学年って書いてあるから無理だよ」と言われました。私はその時まで3年生でした。でも絶対にやりたいと思ったので受けることにしました。そしてオーディションの日、私は自分ができる精一杯のお芝居をしました。まるで夢のようでした。主役の杏役を選んでもらい、座長までさせてもらえることになりました。

8月まで毎週北区文化会館で稽古してもらい、たくさんの人に指導やサポートしてもらいました。北区文化会館の田代館長さん

「二日月」はもともととてもたくさんの人に見てもらいたいすてきな演劇です。またいつの日かこの演劇が北区文化会館で行われることと、また杏役で出られることを願っています。私は「二日月」を経験してお芝居の楽しさを知り、9月からりゅーとびあの劇団に入りました。私に目標と夢をくれた北区の皆さんに成長した姿を見せられるように、これからも一生懸命がんばります。

演劇「二日月(ふつかづき)」座長として

北区文化会館市民劇「二日月」主演・座長

Ikarashi Saya **五十嵐 爽**



若月 大河 Wakatsuki Taiga
劇団アプリコット 団員



演劇と出会って

私が「春のホタル」に出演したきっかけは、「春のホタル」のワークショップに母が誘ってくれたことでした。その2年前の「渇端の月」で初舞台に立った私ですが、「春のホタル」の時はサッカーが忙しかつたので、出演する気はありませんでした。しかし、このワークショップに参加したことで自分も出てみたいと思ひ、出演することを決意しました。母の誘いがなければ、私は今ミュージカルをしていないと思います。演劇は自分が経験したことがないことや経験できないようなことをできる場所と思っています。自分の人生は一回しかありませんが、演劇をする事によって自分以外の何人もの人生を経験する事ができます。それによって色々な考え方を持てるようになります。自分の視野・思考が広がるような気がしています。一つの作品を深く掘り下げる事で様々なことを知る事ができ、自分の



中の引き出しを増やす事ができます。これからも引き出しを増やし続け、自分の生き方の参考にしていきたいです。

また、演劇を始める前は学校の友だちしか知り合いませんでしたが、共演者や北区フィルハーモニー管弦楽団、観客の方々など沢山の方と知り合うことができました。こんな風に多くの方と関わったのは、演劇があったからだと思います。

今後は北区で演劇をする人、観る人がもっと増え、北区が演劇の聖地になるよう自分も頑張りたいと思います。



劇団アプリコットの稽古風景

特別な趣味がなかった私が演劇と出会ったのは、豊栄に嫁いで3人の子育て真っ最中の30代の頃でした。長女が北区文化会館こけら落とし公演「市民劇「渦端の月」」に同級生から誘われ、見学に行ったことがきっかけでした。それから我が家の母子4人はそれぞれ演劇にはまつてしまえば大変?! いえいえ、とても楽しい趣味が出来たのです。

市民ミュージカル「春のホテル」は北区文化会館初めてのミュージカル公演で、興味があつたので応募してみました。私を含めミュージカル初挑戦の参加者も多数でしたが、講師の先生方のお陰で若い力いっぱい

のピュアで素敵な舞台になったと思います。その舞台の終わりに「みんなでもたやりたいね。絶対やろう！」なんて話していたのがまさかの現実となり、再演が決まり私はまた2人の子ともと一緒に参加させていただきました。初演のメンバーに加え、再演から参加の方々も多数集まりグレートアップした作

品となり、大勢のお客様に観ていただくことができました。

演劇の魅力は、一つの作品をみんなで力を合わせて創り上げ観客の方に観ていただき、作品を通じて同じ空間と時間を共有できるという事だと思っています。また演劇の舞台では一人一人が大事で、それぞれが役割を果たして次の役者に見えないバトンを渡していきます。その緊張感も一体感も体験してみたい人にかわらないちようと中毒性のある物かもしれません。そして二期一芸であり、同じ作品でも2度と同じ舞台はなく、舞台が終われば全て無となってしまうという事。

そんな演劇を共通の趣味として家族でやれる事、それを観に来られる家族や親戚縁者がいること。演劇を通して出会った仲間(長い稽古期間で出演者はとても親しくなります)観客として応援してくださいる方々がいる事。そんな出会いに私はとても感謝しています。



練習風景

現在私は北区の演劇くらぶ「葛の葉」で演劇活動をしています。メッセージ性のある作品を観客の心にお届けしている劇団なので、たくさんの方に観て頂き、興味のある方には演じる側も経験していただき、北区で更に演劇が盛り上がりつついく事を期待しています。

演劇の魅力

春のホテル出演者/演劇くらぶ「葛の葉」 団員

Wakatsuki Ikuko

若月 育子



白神 道子 Shirakami Michiko

演劇くらぶ「葛の葉」 代表

地域に演劇の太い根を

演劇くらぶ「葛の葉」は、新潟市と合併する以前から活動を開始し、今年で25年になります。現在は北区文化会館もでき、プロの演劇を身近に見ることができるようになりましたが、当時は、本当に演劇に興味がある人達だけが、新潟市まで出ていって鑑賞するといった状況でした。

そんな中で、平和、自然との共存、故郷の素晴らしさ、平等な人間社会などを訴える、テーマのある演劇をより多くの方々に安価で観てもらいたいという思いで活動を始めました。中でも市民劇「渦端の月」を豊栄市市制施行30周年記念、文化会館落成記念、水と土の芸術祭市民プロジェクトにおいて「葛の葉」が中心となり、多くの市民の皆様と共に、3回も取り組めたことは、演劇底辺の拡充とともに、先人たちの作り上げてきた郷土の歴史を振り返るとても良い機会だったと思つています。

舞台をより快適に観ていただくためには、ホール形式の観客席が必須です。北区には550席のホールを持つ立派な文化会館は建ちましたが、1団体が安価で市民の皆様から演劇に親しんでもらうには大きな予算が必要となります。小さな団体が手軽に使えることのできる200〜300人規模の小ホール

の建設、もしくは、営利を目的としない地元の団体には何らかの優遇措置を考えていただけたらと常に感じております。

「渦端の月」のように郷土への思いを込めた市民劇などは、多くの日々と多くの市民が関わって作り上げるものです。過性のものとせず、継続事業として行政と市民との協働で取り組む事などを模索していただきたいと思います。

那須でこのような協働の取り組みが20年余り続いていて、毎年出演者が後を絶たないそうです。こういう取り組みがなされてこそ、演劇文化の底辺が広がり、文化の向上につながっていく事と思います。老若男女、誰でもが手軽に楽しめる演劇を目指して、これからも頑張つて活動していきます。



演劇「渦端の月」



第32回菱湖展での講評

の立ち上げに関わりました。現在私はその審査員を務めており毎回多くの作品を審査しますが、北区の子どもの作品は線が太くて強い、そして純粋なものが多いと感じています。北区はかつて松蔭先生が葛塚で書を教えていたこともあり書道が盛んで、その教えが今も息づいているためかと思えます。

また私は昭和46年に書道グループ「菱湖会」を創設し、今もその指導にあたっています。会では北区郷土博物館で毎年書展を開催しており、最高の作品をお見せできるよう会員たちも熱心に書いています。私も日々の指導に熱が入っています。こういった活動で、北区の書道振興に少しでも貢献できれば幸いです。

私は二字から四字の可読性の高い漢字の書を制作することにこだわりがあり、平常心掛けていることや自分自身への叱咤激励など、素直な気持ちを書で表現しています。実は私の作品展をここ2〜3年のうちに開きたいという願望がありまして、80歳を過ぎた身ですが、もつと上手くなるために今でも毎日稽古を欠かさず、常に新しいものを書いていきます。本気で書いていることが伝わるような作品を出せればと願っています。



博物館まつり 超大筆パフォーマンス

北区の書道振興

新潟県書道協会 顧問

Oguro Tadashi **小黒 忠**



渡辺 宗敏(敏子) Watanabe Soubin

北区市民茶会実行委員長



一花開天下春

この茶会は、旧豊栄市で開催してきた茶会が母体となり、広域合併、政令市への移行と、その都度組織の衣替えを重ね、北区として一体感の醸成にも努め、拡大をしながら今日に至っています。平成29年も第11回の茶会を4月に開催し、すっかり北区の春のイベントの一つとして定着していることを喜んでます。



市民茶会



市民茶会

めにお茶を点てるもので、相手がいて初めて成立するものです。そこでお客さまのことを考えながら、道具の取り合わせ、しつらえなど様々な趣向を凝らします。このことが即ち「もてなしの心」に通じるものでないでしょうか。

私たちはお客様に二服のお茶を点ててお出しし、「おいしかった」と言っていただけのように、これからも精進していきたいと思っています。今後この「もてなしの心」を大切にしていきたいと思っています。

北区の発展を支えるため、また、住みやすいまちづくりを進めるには様々な施策が必要であり、茶の湯など広範な芸術文化の振興策も必要なことと思います。そのことが市民の心の豊かさを育み、まちに潤いや品格を与え、住んでよかった、ここが郷土だと思ってもらっていただけるものと思えます。そのようなまちづくりを期待します。

「松浜太鼓」 41年の時を経て



しかし、ここまで伸びかけた芽を絶やすわけにはいかないと更に結束を固め、打ち手として残った少数の子ども達を核に、参加呼び掛けを小中学校や各町内会に広げ、打ち手の増員と演奏指導に奔走し、新たなチーム作りを試み「松浜太鼓」を存続することが出来ました。現在ではその子ども達も大人の打ち手として立派に成長し、後継者育成の指導者として活躍しております。

昭和51年、松浜祭りの核として誕生した「松浜太鼓」。誕生にあたっては新潟樽砦(たるき)たきめた保存会の力強い協力を得て、北新潟商工振興会青年部有志により松浜祭り太鼓部を結成。日本海と阿賀野川の四季をモチーフに創作された「松浜太鼓」を演目としてスタート。松浜祭りには欠かすことの出来ない事業へと展開してまいりました。

華々しくデビューした太鼓部でしたが、月日が経つにつれ活動内容や練習に対する意見の食い違い、更には創作者との離別、太鼓の保管場所、練習会場での近隣の苦情や活動理念の食い違いなど数々の問題が表面化、昭和57年から62年にかけては打ち手メンバーが4人まで激減し一時は消滅の危機にまで立たされました。

また、活動の継続にあたっては、太鼓器材の修繕・維持管理費用の問題もありました。運営費については、メンバーの会費収入と自治振興会からの助成金、松浜祭り太鼓巡行での訪問先自治会や事業所、個人からのご祝儀で賄われます。しかし、その範囲では遠征費用捻出に苦慮するため、現在は活動範囲を若干狭めて、地元や近隣市町村、福祉施設などの訪問演奏を中心として展開しております。北区博物館祭りやキテ・ミテ・キタク

60年代に入り大きな転機が訪れました。私自身二代目の代表を務め新潟県太鼓連盟・新潟市伝承芸能保存会に加盟したことで、県や市の主催事業及び近隣市町村での芸能祭りの出演や、保育園、小・中学校、福祉施設等からの出演依頼が増加し、活動範囲が県外や海外まで広がりました。

例として、ウラジオストク開港記念「新潟県民の船」友好使節団への選抜、「韓国にいがたフェア」キャラバン隊や新潟市姉妹都市提携記念事業「アメリカガールベストン友好訪問」への参加、ハンガリー公演の実施等があります。平成20年頃からスケジュール調整が難しくなり、演奏活動の見直しを考慮せざるを得ませんでした。

松浜太鼓保存会として郷土芸能「松浜太鼓」を継続維持していくには、運営費確保を念頭に置かなければなりません。しかし、現状では発足が戦後という位置づけで継続年数が短いことから、伝統芸能として扱われず各種助成金制度にも該当しないため資金確保が大きな課題となっています。

極力大きな出費を控えながら演奏活動に支障をきたさないよう心掛け、従来通り訪問演奏やイベント出演など精力的に取り組んでいく傍ら、後継者育成にも力を注ぎ、「松浜太鼓」を守り「地域の宝」と名乗れるよう努力を惜しまず精進し、演奏活動を継続して参ります。

御山伊佐弥神楽 (おやまいざやかぐら) の復活

Ishida Takao

石田 孝雄

御山伊佐弥神楽保存会 会長



「この獅子頭でなんとか神楽舞を復活させることが出来ないものか」

皆様と地元企業からの賛同を賜り寄付金を募りました。地域の皆様方による住民パワーの結集そして新潟伊佐弥神楽保存会の皆様方のご指導のお陰で復活できたことは今以て感謝の念に堪えませぬ。

そして翌平成28年9月の秋祭りでは、地元の新聞紙上に神楽復活の記事が掲載されたこともあり、北区をはじめ東区、また新潟市以外からもお客様がお出でになり、境内が溢れんばかりの人で賑わいました。それは今後、神楽舞が必要であることを再確認した時でした。私の願いは祭りを通じ顔と顔が見える地域にしたいということで見える地域にしたいということで見える地域にしたいということで見える地域にしたいということで見える地域にしたいこと

平成27年9月秋祭りの反省会で公民館の床の間に飾られ、壊れた獅子頭を前にして誰となく発したこの一言から神楽復活物語は始まりました。しかし65年もの時が過ぎ、獅子舞を踊れる方が地元にはいません。そこでその昔尾山からお隣の新崎に伝えられたという御縁で新崎伊佐弥神楽保存会様から指導を仰ぐことにしました。初めて触る笛や太鼓の音の出

方、舞の順序や姿勢などから学びました。当初は本当に出来るのだろうかと心配だけで二杯でしたが、練習の映像を持ち帰り復習をして、1年足らずでひと通りの形が出来るようになりました。また、費用の大半は地域住民の

新潟県は全国で神社の数が一番多いとのこと。北区にも多数の神社があり、そこには多くの神楽舞があることを知りました。そうしたことから北区全体の祭りマップを作成し、その地域の祭りや神楽舞を観て回れるようになればと願っています。何よりも地域の皆様方が、顔と顔を合わせて交流している姿を見たくて……。

また、費用の大半は地域住民の



ルは高いと思います。スポーツ・芸能・絵画・書道・茶道・華道・陶芸・写真・農業や工業に至るまで、県下のみならず全国的にも指折りの方々が多いと聞いています。

もちろん「文芸あきた」も、毎年200以上の作品が集まり、随筆・論文・小説・童話・コント・詩・短歌・俳句・川柳

と、内容も豊富で宝箱のようです。

北区の文芸誌として「文芸とよさか」から「文芸あきた」(阿賀北)になったこの10年は、平成19年本州日本海側唯の政令指定都市としての新潟市とともに歩き始めました。

昭和60年「文芸とよさか」創刊から33冊目を迎え、「文芸あきた」になってからも平成29年で11冊目となります。

中学生以上で、この地にご縁のある方ならどなたでも応募できますので、他県からも寄稿くださる人もいて、熱心な投稿者に支えられ北区の文化へのささやかな貢献ができますことを編集者一同光栄に思っています。

文化に対する北区の皆様のリベ

ませんね。

人生の先輩の優れたうんちくのある内容の作品には頭が下がりますが、大変感謝しておりますが活字離れの時代がともに残念です。新聞も本も読まないスマホやパソコンの世代、またもうすぐAI(人工知能)が支配する世の中において、レトロな文芸誌をコツコツ作っていく…。珍しい遺産になるかもしれませんね。

文芸誌から見る10年

文芸あきた 編集委員長

Araki Kyouko **荒木 京子**



竹井 友輝 Takei Yuuki
マンガ絵師



地元の文化を取り込んだ新しい漫画スタイルの追及

2011年5月に両親や友人の影響を受けて渡仏し、右も左もわからないまま一人外国で生活を始めました。仕事も忙しく充実した毎日でしたが、このまま時間が過ぎていき帰国することが何かもつたないような気がしていました。フランスのパリにて漫画講師をしていた私があと3カ月で日本に帰国するという時のことです。

この異国の地フランスに自分の足跡を残したいと思い、漫画講師を辞めて展示会を行うことにしました。

世界一の芸術の国で今までにない新しい漫画作品を作る。私は作品の制作に没頭し、2カ月後、展示型漫画作品を完成させ人生初の個展をパリで開催することができました。

その後帰国した私はこの展示型漫画のスタイルの確立に全力を尽くしました。手本も無く先駆者もない展示のためだけの漫画制作は、どこか自分の知らない異国を旅する不安な感覚に似ていました。

1年、2年、3年と作家活動を続けていく中で新しい漫画を作る情熱が少しずつ無くなっていることに気付きました。先の見えない自分の人生と作家活動は、異国を旅するよりはるかに難しく辛いものだと知りました。



作品の前で

そんな時、偶然同い年の作家たちと知り合うことができました。私にとっては初めての同業者との出会いです。彼等は私にとつての道標のような存在で、この新潟の風土や歴史文化を学ぶきっかけを与えてくれました。

様々な刺激を受け、再び作品制作の情熱を取り戻すことができ、地元の新潟をテーマに新たに漆を画材に加え、漫画作品の制作に取り組みました。自分にとつて一番身近な伝統を見つめ直し作品としていく行動は、最初に感じた異国を旅する不安ではなく、日本の魅力を発見していく喜びの連続でした。

この新潟に生まれたことに誇りを持ち、伝統と漫画の融合した新たな作品の誕生を目指して、この旅を続けていきたいと思っています。

北宝隊のお宝ものがたり

北宝隊 代表

本間 修一

Honma Syuichi

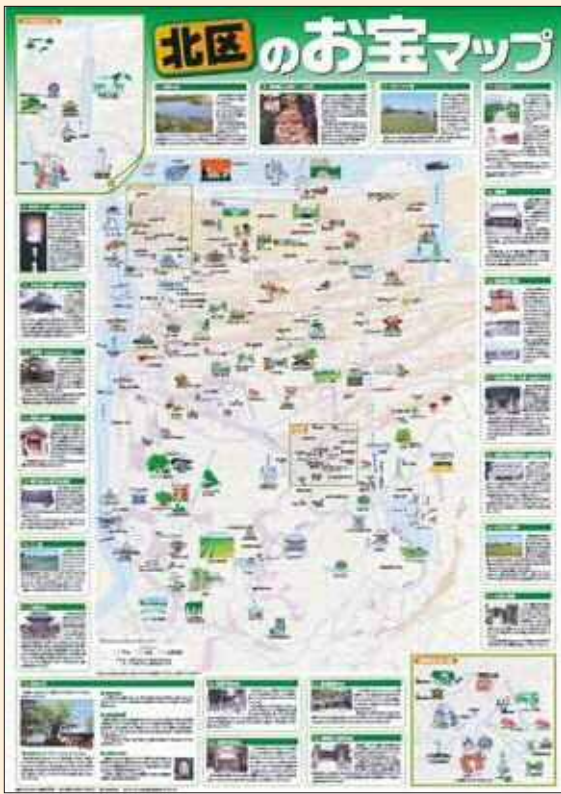


り事業」の一つだったので、その他にも大判の『北区のお宝マップ』や『DVD北区のお宝ものがたり』を作成した。北区の各地区から参加した有志の方々には本当にお世話をおかけた。とても生半可でできる仕事でないことだと今更ながら思っている。

三年間の区づくり事業が終わってから「お宝ものがたり編集部北宝隊」は「北宝隊」として再出発した。会の目的は「北区の地域文化お宝再発見と発信」である。

『ガイドブック 北区のお宝ものがたり』の初版発行は2009(平成21)年3月である。編集は「お宝ものがたり編集部北宝隊(ほっぽうたい)」。作成は22名の隊員と新潟市豊栄博物館(現新潟市北区郷土博物館)の職員とで行なった。区制制定による「北区の特色ある区づく

みる。北区お宝探訪ガイド養成講座、お宝郷土食ごちそうさまシリーズ、『葛塚町歩きマップ』及び『松浜町歩きマップ』の作成、北区観光誘客バスツアー、にいがたまち



北区まるごとめぐりツアー

あるき交流会、フリーペーパー発行。

大判のお宝マップを作成して、全戸配付した2007(平成19)年度から数えると北宝隊も10年たった。今年度10月に西区の皆さん20名を町あるきに案内した。石動(いすずき)神社や味噌屋、お菓子屋などを歩き、大変喜ばれた。

北区の良い所は人情だと思う。葛塚六斎市組合長(当時)の洋服屋さん、割烹中常楼の女将さん、栗原製菓の女将さん…。みんな気さくで優しい人たちばかりである。

北宝隊は現在、十数人のグループであるがまだまだ北区に埋もれているお宝を捜し出し、北区の皆さんに発信していきたいと思っている。がんばります！自分たちも楽しみなから…。

生涯学習としての「とよさか中高年教養大学」

とよさか中高年教養大学 代表

貝沼 英樹

Kainuma Hideki



とよさか中高年教養大学入学式

やることがある」こと、そのものである。 「とよさか中高年教養大学」の特色は、一切の公的支援なしの自主運営であること、運営に携わる8名のスタッフもすべてボランティア活動であること。12の全教科を毎月定期的に関講し、しかも自分の好む教科を何科目受講しても良いシステムである。

リタイア後の20年とも30年とも言われる余生を如何にハッピーに過ごすかをメインテーマとして、開講した「とよさか中高年教養大学」も、今年で25周年を迎える。 リタイア後の人生を有意義に過ごす方法も色々ある中で、生涯学習は有効な手段であることは間違いない。毎年百人前後の皆さんが日々学習に励む姿は、リタイア人生の全てをプラスに作用しているものと考えられる。 まさに「きょういく」「きょうよう」は「今日行く所がある」「今日やること」である。この世に生存中どの程度発揮しているだろうか？識者によれば、人によつて差はあるだろうが、平均するとせいぜい10%そこそこという。残る90%は殆ど手つかずにあの世へ持つて行っているという。これほどもつたいないこともないし、人類の偉大な損失でもある。一人の老人の死は、大きな図書館つを失うことと同じともいう。とよさか中高年大学の教科活動は、単に高齢期の活性化に寄与するだけではない。人類の持つ能力再開発でもある。学習される皆さんの才能の再開発と再利用に期待したい。超高齢社会の課題、「介護」「医療」も日常生活学習に関わる面は大きい。毎日の学習活動が「介護予防」「医療費削減」につながれば幸いである。 「とよさか中高年教養大学」の持つ良き伝統を次の世代へとタスキをつないでいきたい。



北地区歴史文化研究会 会長

Hirata Takamasa **平田 敬正**

知識を広げてもらいたいと「中学生ガイド(中学生によるまち巡りガイド)」の養成講座を企画しました。

私と中学校との関わりは2004年、現北地区歴史文化研究会が発行した「松浜橋ものがたり」の作成がきっかけでした。読者の年齢層を12歳以上と決め、文章作成を松浜中学校にお願いし、夏休みを利用して5〜6名の生徒さんに読んでもらい、漢字のルビ、語意の解釈などを図書館司書にも相談してまとめ、2刷まで発行しました。

そして当時研究会の会長だった私とその講師を務めることになりました。校長先生、担当の先生、地域教育コーディネーターからも協議して戴き、1〜3年生12〜13人を対象にスタートしました。

また2005年から松浜コミュニティ協議会教育文化部が生涯学習の一環として「松浜の人に学ぶゲストティーチャー」を始めました。私も「郷土の歴史」と題し今年で連続13回ゲストティーチャーとして参加をしています。

最初は資料を棒読みしていた生徒も見受けられましたが、回を重ねるにつれてほとんどの生徒が自分で要点をまとめ、自身の口調で話すことが出来るようになり、生徒に積極性が現れ始めました。このことは生徒が自分の故郷を再発見し温故知新を実践しているものと確信をしております。

2009年にスタートした「水と土の芸術祭」には、県内外から大勢の人が当地を訪れ松浜の町も活気に溢れました。北地区公民館ではその翌年から地域おこしの一助として「有情のまち巡り」を計画。毎回募集定員を超える申し込みがあり、今年も10月に管内の「町巡り」で1日かけてお客様をご案内しました。案内・説明を務めた私も毎回が自己啓発になっております。

私はこれからも北区の歴史や文化を研究しながら、学校と関わっていきたくと思っておりますが、地域の方々や学校の児童生徒も一緒に故郷に興味を持ってもらいたいと願っています。

このような積み重ねがあつてか、2013年北地区公民館が主催事業として地元の中学生から故郷にそして校区に興味を持ってもらい、

北区の歴史と学校の関わり

平岩 史行 Hiraiwa Fumiyuki

水と土の芸術祭2018実行委員会 副実行委員長



これからのために足元を見つめる

新潟水俣病を根底のテーマにしたドキュメンタリー映画『阿賀に生きる』(佐藤真監督)の上映会を2013年9月から阿賀野川流域で開いてきました。河口のまち松浜から始め、公式確認から50年を迎えた5月末、原因企業の昭和電工鹿瀬工場があつた阿賀町鹿瀬地区で上映を行いました。

私は多くの住民が被害に遭つた松浜で生まれ育ちました。ですが新潟水俣病のことについては「教科書の中の話で過去のことだ」と思っていました。

市内で2012年に開かれた水と土の芸術祭で、被害者支援をしていて映画『阿賀に生きる』の制作仕掛け人である旗野秀人さんらと出会い、作品を知りました。

それまで他でボランティア活動をしていた私は今もなお続く新潟水俣病について全く理解しなかつたことに大きなショックを受けました。自分が注力する場所は、自分の足元であることに気づかされました。

自分と同じように水俣病を知らない若者にも見てほしいと思



『阿賀に生きる』上映会準備

育つた作品を鮭になぞらえ、流域を廻りながら上映する「阿賀野川遡上計画」を企画しました。

鹿瀬上映は通過点だと思っておりますし、今も様々な場所での展示、講演などを開催しています。映画完成から25年となつた2017年には

「佐藤真と新潟」と銘打つて、2週間の特集上映会、音楽会、展示会を行いました。山形国際ドキュメンタリー映画祭で企画された「あれから10年」今、佐藤真が拓く未来」では最初のゲストとして招待されました。

これからも多くの人にこの作品をなげかけてみたいと思います。未来のために。

教育の重要さについて

Iou Yumiko

伊藤 裕美子

新潟市教育委員会 委員



——教育委員のお立場から合併時の感想をお聞かせください。

伊藤 私は環境教育のボランティア等をしています。そういう市民の目線で、ということで教育委員をさせていただきました。合併したときの期待としては、この地区の良さが新潟市となっても発揮されたり、また外から刺激を受けて、北区の良さが発展したりすることを期待していました。

また、私は自然が好きで、こへ転入した時には庭にホタルがいたり、屋根の上でオオヒシクイや白鳥の声が聞こえたりしたことにとても感動しました。子ども達にも自然が豊かであることの素晴らしさを伝えていきたいので、環境NPOの一員として、福島潟自然文化祭で、学生たちと一緒に楽しく自然の豊かさを伝える活動を続けています。

最初にこちらへ来た時には、歴史や文化の奥深さにびっくりしました。社会教育が充実しているのは先人達の血を皆さんが受け継いで、歴史等を大事にされているためだと思っています。

子ども達に大人が楽しく遊ぶ姿を見せること、バトンがつかえるように自分たち各自興味のあることで楽しく活動できることが社会教育の原点だと思います。つながら

という点では、福島潟生き物カルタ植物編を作った時に、当時の太田小学校の子ども達が絵を描いてくれました。その子ども達はリピーターになってくれて、ある時の福島潟自然文化祭に母親になって来てくれたことがあり、感動しました。手伝ってくれていた学生達からもびっくりされました。このカルタのおかげでそういう出会いもあるのだということ、そういうことも豊かな自然を伝えていくためのヒント

——学校ボランティアをされているそうですが、どのような活動をしていますか。

伊藤 学校と地域パートナーシップ事業や中学校区育成協議会等に地域の二員として参加しています。平成29年には「防災教育」学校・地域連携事業をテーマにして各校に行きました。

光晴中学校や葛塚中学校区、松

浜中学校区等でいろいろな活動を見せていただく中で、ワークショップをやる、「顔が見える関係が大事」というキーワードでまとまりました。

どの地域でも一生懸命やっておられる、登下校の安全パトロールの活動も、顔が見えるものです。このような顔の見える活動を継続することは大切で、いざという時に人がつながり支え合うきっかけになると考えています。

いろいろな地域での教育ミーティングなど、情報交換で区役所の人も一緒に参加してくれています。行政の支援として、地域での広報を繰り返すことがすごく大事だと思います。

——今後の子どもたちの教育について大事なことは何でしょうか。

伊藤 まず食育や地産地消について、平成29年度は北区文化会館で教育フォーラムが開催されました。各学校の総合教育として地元のス



笹山小学校のスイーツ開発

ーツ開発をする取組みの発表がありました。子ども達のアイデアが生きているということで、農産物から商品化へとつながっていると感じました。

また防災でもそうですけれども、長期計画でやるというアドバイスをもらい、大事な指摘だと思いました。これから先の十年のために、今年は何をしようか、私達も見通しをもつて活動を積み重ねていきたいものです。

——地域の発展と教育についてご意見をお聞かせください。

伊藤 北区は小・中・高・大と学校があることで、地域貢献として産業とつながる活動があると思います。この地域で育った人が、人にやさしい開発をする場があつたりするといいですね。

また、言語も文化の扉を開くかぎだと思つたので、英語や国際交流についての教育も大事だと思います。私は高校の時、ホームステイを

したことがありました。滞在先で日本食について尋ねられ、現地の食料店から食材を調達して、焼きそばやわかめ汁を作りました。こんなにやくや海藻等になじみがないことに驚きましたが、異文化交流が興味深いことを実感しました。言葉というのは文化を伝えるための道具なので、まず自分の文化を知らなくてはいけないことも分かりました。

子ども達は地域から外に出て、働くようになるかもしれません。大切なのは、地域に育まれること、地域の文化や魅力を学び、郷土愛が育まれることです。文化にふれて育てば、離れたとしてもその思い出がその人を支えるのではないのでしょうか。だから文化や郷土の魅力にふれる学習は、意味があると思っています。

地域のことを知って少し離れて外から見たら、他の人の話を聞いてみたり、他の地域を見てみたり。そうする中で一人一人が北区をふるさととして、いいところだと感じて、その魅力を発信してくれたらいいな

外国の方と コミュニケーションを 図れる人材や場を

小学校教員
(元日本人学校勤務)
滝澤 富明
Takizawa Tomiaki



「人生を楽しんでいる」と感じました。

現地はスペイン語とパラグアイ固有のグアラニー語という2つの言語を母語としています。英語はほとんど通じません。赴任当初、英語を話すことのできる日本人学校の警備員セルヒオさんと仲良くなり、スペイン語とグアラニー語を教えてもらいました。日本人である私が「バエシヤパ? (元氣?)」とグアラニー語で挨拶をすると、コミュニケーションはより深まり、自然と距離が縮まりました。彼らとはサッカーやアサード(南米式バーベキュー)を楽しみました。現地の方々とコミュニケーションを図ることができた様々な経験は、貴重な宝物です。

パラグアイは南米中央南部に位置する共和制国家です。私は2003年から2006年の3年間、首都にあるアスンシオン日本人学校に派遣されました。日本人学校とは、海外子女のために設置された小・中学校課程をもつ全日制の教育機関です。日本の教科書を使った教育を行うほか大統領府等の施設の見学、現地校との交流等、特色ある教育を行っています。その教育に携われた経験は10年以上経った今でも私の財産となっています。

パラグアイ人は親日でラテン気質、陽気で気さくな方が多かった印象です。週末にサッカーを楽しむ人々、深夜まで大音量でフイエスタ(パーティー)を楽しむ人々…。

パラグアイでの活動の様子



パラグアイでの活動の様子

北区の子どものため、幼い頃から気軽に外国語を楽しく学んだり外国人とのコミュニケーションを楽しんで世界を身近に感じる人材と場が地域に必要であると考えます。

フロリダから北区へ

Erik's 英会話講師
元豊栄市・新潟市英語指導助手
エリック・ビグラー
Erik Biegler



しかけてきたり、コミュニケーションをとることに慣れてきた感じがしています。また、大人の方たちも学びたいという人が増え、幅広い世代に英語を教えています。新潟で見かける外国人の人数が増えたことも人々に与えた影響は大きいでしょう。

今後の英語の習得について、できれば学校の授業以外でも英語に触れてほしいというのが私の願いです。自分が生きる世界を広げられたら、やはり英語は大事な手段です。

早いもので日本に来てから20年の月日が経ち、この北区においては16年住んでいます。英語の指導は豊栄市時代から、保育園、小学校、中学校で携わってきました。豊栄市の時も子どもたちの英語教育のサポート体制はよかったです。英語が国際語として重要視されてきた背景もあつて、合併してから学校での英語の授業が増え、さらにサポート体制が整備されてきています。

子どもたちはというと、以前は恥ずかしがってかわいい感じでした。じろじろ見られることもしばしば。今はテレビなどで英語に触れる機会が増えたせいか、前より話

私は縁あつてフロリダから北区に移住しました。自然があつて、住みやすくストレスがない。冬の雪かきはみんなが手伝ってくれます。海や山、温泉にも行くこともできます。都会と田舎の間という距離感がいいのではないのでしょうか。夜は静かで、星も見えます。よく、福島にも自転車で行きますが、周辺を歩くと気持ちがいいです。同時にクリーン作戦など自然保護に努めていることも大事なことだと感じています。

あえて将来に期待することといえば、その良さを知ってもらうことも含めて人を引き寄せるものがあるんじゃないかと思っています。アウトレットモールなどがあれば、近隣の人はレストランなどにも行きますので、お金を落としてくれます。また北区は色々なレストランやバーなど飲食店がありますので、身近な区民の人たちがたくさん利用するのいいのではと思っています。

これからも様々な方々との出会いを大切に、アメリカでの生活経験などから感じたことをお伝えしたり地域の文化活動に関わるなど住みよいまちに貢献していきたいと思っています。そして将来を担う子どもたちの成長を楽しみにしています。

地域教育 コーディネーター としての活動

松浜中学校地域
教育コーディネーター

岡 昌子

Oka Masako



ました。今では地域ボランティア、全職員一丸となって学習支援を行っています。

北地区公民館から「中学生地域ガイド養成講座」開催の依頼がありました。中学生にとつてはとても有意義なことでしたが、ガイドを行うための学習時間の確保と日程調整に苦労しました。当初、生徒会が核となりスタートした「地域ガイド」ですが、公募での生徒も加わり今年で6回目になりました。

地域が学校を支援する活動の一つ、学校見守りボランティアとして週1回、放課後二人で中学校に向いてきたことがきっかけで松浜中学校のコーディネーターになって8年が経ちました。その経緯から放課後生徒と関わる時間を持ちたいと思いい、朝から夕方までの勤務を

お願いしました。私たちの部屋を「ワークルーム」として昼休みや放課後、生徒の来室を歓迎しています。

私たちの初仕事は「学校見守り応援隊」を結成することでした。地域の方に学校に入って頂くことで、学校の雰囲気は少しずつ変化していったと思っています。それから夏休みに入ると行われる生徒の個別学習支援にできるだけ多くのボランティアを集めてほしいとの要請があり、地域の方や新潟医療福祉大学の学生さんに支援をお願いし

早通中学生と 地域との連携・協働

早通中学校地域
教育コーディネーター

伊藤 興亜

Itou Koua



が、その一つとして早通中学校創立20周年記念行事で通学路に手作りのプランターを置いて花を植える事業をお手伝いしました。

それ以来ここは「早通フラワールード」と呼ばれ、毎年地域の各地と合わせて行われる春、秋の花苗の植替え事業には300名以上の地域の方々や中学生が参加する地域恒例の行事になりました。

十数年来継続してきたこの活動を顧みると協働の要(かなめ)として植替え前の作業や水やりなど保守管理に努めてこの活動を支え、中心的な役割を担ってきた早通老人クラブのメンバーや多くの住民の方々のご協力を忘れることはできません。

このような環境で育った中学生



早中総おどり隊(福島潟自然文化祭)

また「早中総おどり隊」は地域の行事ばかりか北区の各所で、元気の種々を蒔いています。このようなどころから早通中学校は平成28年に地域と学校が連携した「地域学校協働活動」に係る文部科学大臣賞を受賞しました。

私はこれからも縁の下の力持ちの立場で、地域とのつなぎ役を務める所存ですが、早通中の生徒たちが今後も地域と連携・協働して早通の街づくりや防災の担い手の役割を果たすことを期待しています。



早中総おどり隊(早通ふるさとまつり)

北区は日本のノースカロライナ州になれる。 ユニバーサルデザインのみちづくりを目指したい。

Maruta Akio

丸田 秋男

新潟医療福祉大学 副学長



——北区は面白いですよ。大学

もそうですけれども、色々なものが揃っているものだから、これらみんなをつなぎ合わせるというか、力を合わせていけば人口減少問題とか色々な課題に対しても対応ができるかなというところが、非常に面白いと思います。

丸田 昨日にわか仕込みで、北区の特徴をデータで見えたのです。北区は保育所の定員数が、人口1000人当たりで割り返すと8区中トップで、認定こども園を含めても、変わらないようです。また、障がい児者の自立支援に向けた利用者定員数も計算してみました。が、トップのようです。さらに特別養護老人ホーム、老人保健施設、グループホーム、ケアハウスなど高齢者の方々の介護サービス体制についても、定員数で見るとトップレベルです。

学生の数も人口1000人当たりでどこが一番多いかと思いましたが、北区なのです。区のオリジナリティのあるイベントでの参加者数も、人口1000人当たりで割り返すと、トップなのかもしれませ

ん。

区民の方は、北区が持っているポテンシャルに気づいてないのではないのかと感じています。北区の色をわかりやすく表現できると面白いと思います。

また、区民の方はあまりご存じないようですが、豊栄病院が取り組まれている在宅医療のセーフティネットも、市内で一番です。豊栄病院がバックアップ病院になって、事前患者登録制のような仕組みが動いているのも北区の大きな強みです。教育・福祉だけでなく、地域医療を含めれば、優れたポテンシャルがあると言えます。

——そうですね。その辺のアピール、私も整理して、暮らしてみたいランキングという色々な利便性なども含めての評価になってくると思うのですけれども、そこに訴えかけられるように。

丸田 もう一つのテーマとして、太陽の村で長らく施設長をしていた方が常々言っていましたのは、「北区は日本のノースカロライナ州（ユニバーサルデザインの発祥地）になれる。障がい者に優しい、高齢者に優

しいまちを目指したい」と。北区はやはりすごいポテンシャルがあるのではないのでしょうか。

自分たちのまちを謙遜したり、陰で自慢していないで、北区が日本のノースカロライナ州を目指すことのできる可能性というか、夢みないなものをみんな考えていっても



いいのではないのでしょうか。

——これから10年を考えたときに高齢化はまだしばらくは進んでいきますよね。福祉の面から見ると、このこれからの10年を見据えることも、もともと優先度が高いと思われることはどういったところでしょうか。

丸田 福祉の面からこれからの10年を見据えると、例えばサービス

が必要な高齢者に対して制度やシステムで対応するだけでなく、高齢者自らが元気に健康に日々暮らすことを意味づけ、そのことを区民の方々に伝え共有するような施策が必要ではないでしょうか。

子育て支援においても、サービスや仕組みを提供するだけの施策でいいのかなと思っています。

家庭で育てることが家族にとっても素敵なこと、どういう価値があるのかを区民の方と共有していく施策があるのではないのでしょうか。

健康づくりが大事だと言うだけでなく、自分にとってどういう価値があり、健康に生きることが家族にとっても、地域にとっても意味があることに気づくことができる

と、人間の行動は随分変わるように思っているのですが……

——そうですね。網羅的に考えがちなのですが、網羅的にやるのは私は難しいと思うのです。この地域で一番必要なところから、まず、やりましょうと。

丸田 少し話が外れるかもしれませんが、現在、新潟県の子育てモデル

ル事業にかかわっています。普遍的な子育て支援も大事だけれども、一方で子どもがほしいという人が間違いなくいるし、そこに合わせて必要な経済支援をしたり、働き方の支援をする必要性を感じています。

子どもがほしいという人に対して、経済面も含めて援助していくことが許容される社会を目指したいと思っています。

ほしい子どもの数と実際に生んでいる子どもの数の間にギャップがあるというデータだけでなく、そこには質的な意味があることもはっきりしてきました。

制度とかシステムとして固定化していくような福祉の枠組みも大事なのでしようけれども、一方で、それを超えるような福祉社会のあり様とその実現に向けた取り組みをみんな議論してもいいと思えます。

思い切った考え方は国政レベルでは難しいと思いますが、自治体レベルでは考え方を少し転換すること、で新たな可能性がでてくるのではないのでしょうか。

——先生は医療だけではなく、医療を含めた福祉全般に関わられていらっしゃるんですね。

山口 在宅医療として往診をし始めて、往診の中で医療だけではできない地域の問題を感じていました。一番大きいのは今まで医療というのとはどちらかというと治すという立場だったわけです。しかし高齢者の中では治らない人もいます。そうすると、私のようなかかりつけ医、地域のお医者さんがやることは、治すことよりも支えることが一番大事ではないかと感じています。

この10年で二人きりで生活している人たちが、孤立して生活している人たちが、あるいは認知症でご自分のことができなくなっている人たちのことが急速に問題になってきています。そういう方々はどうしても医療だけでは対応できない。そうすると、介護士、ヘルパー、訪問看護師。さらに地域の方、民生委員の方々の援助が必要になります。地域と医療、介護を結びつけることが今まであまりできていなかったという課題が見えてきたわけですね。

数年前に、早通の将来を考える会を地域の方たちと一緒立ち上げて、その中で住民にアンケートを採ってみました。そのアンケートの中で皆さん一番関心があることは地域の医療、介護で、それをしっかりとしてほしい。ボランティアは自分たちがやるから集まるところがほしいという要望がありました。

そういった要望の中から地域の中のいくつかの不安や問題といったものを地域の人と一緒に考えれば考えるほど、他の職種の人たちと連携が必要だということを感じ、「ごせいやネット」という多職種連携で在宅医療を支える会を立ち上げました。

自分が病気になるって倒れてもきちんとした医療を受けたいという住民の願いを叶えるために、地元

豊栄病院の先生と相談し合いながら、在宅で看取しても急変したり、病気になるたりしてもすぐに入院できる「在宅バックアップシステム」というシステムを構築しました。このシステムは非常にうまくいって、住民の方が安心して在宅でも生活できると思っています。ではないかと感じています。

まず地域の中で医療や介護を安心して受けられる状況を作る。次に病院から退院後、自分が住んでいたところ、生活するところに戻って来られる環境整備をしなければいけないと思っています。

——多分10年前と比べると、二人暮らしの方の割合であるとか、当然高齢化率も変わってきているので、支える側の状況なども変わってきていると思うのです。ボランティアや支える家族、関係者の状況はやはり年々厳しくなってきたのでしょうか。



早通健康福祉会館

この健康福祉会館で今聞かえているカラオケなどの楽しみやボランティアを通して、人のつながりができて、そのつながりは、今日あの人来ていないけれどもどうしたの？という話になり、先生に往診してもらおうとかという話になるわけです。僕が手に負えなければ介護の人に来てもらおうとか、もしいでよと。一人で飯食っていてもしょうがないんだからといって、子ども食堂で食べたりできます。このように高齢者の問題を通り越して子どもの関係や、地域の子どもの問題すらも巻き込んでいきます。人間の一番大事な、自分には価値がある、人に何かをすることが自分の生きがいであるということ、思い起こせるということが人間にとって大事だと常に思っています。

し、どうしていいかも分からない。そういった要望の中から、早通健康福祉会館ができました。そこでは「ささえあいネット」というものを立ち上げて、住民の方がボランティアのような形で住民同士の支え合いを行っています。人を信頼して自分たちが人に対して何かやることを生きがいを感じる。その人が生きがいを感じればまた次の人につなげていけるといった、ボランティアの精神、ボランティアの気持ちを広げていければいいなと思っています。

山口 アンケートの中であなたはボランティアに参加したいですか、できますかという問いに私ははいですと、高齢者の皆さんは言うのです。ただその場所も分からない

今後、僕らが目指していかないといけないのは、大きなコミュニティではなくて、小さなコミュニティで、そこで幸せに生活できる、歩いて行ける距離の中にすべてが整っているという社会を作らなければいけないのではないかと考えています。

区長 interview

歩いて行ける距離の中に すべてが整っているという社会を。

山口クリニック 院長 / 北区医療と介護のささえあいネット 代表

Yamaguchi Masayasu

山口 正康



民生委員の視点からみる 地域と福祉の連携について

Makino Aisuko

元新潟市北区民生委員

牧野 敦子



——長く民生委員として地域に貢献されてきましたが、合併前後はどのようなお気持ちだったでしょうか。

牧野 果たして今まで育んできたものが繋がっていくだろうかという、そういう気持ちはありました。

確か3000項目とたくさんさんのすり合わせがあった中で、やはり豊栄市時代の高齢者の人達を喜ばせる施策とか、いい施策がなくなっていたという印象がありました。

豊栄市のコミュニティ協議会を作るときに、小川豊栄市長がこれからは地方分権だと、ここで独立してやっていくような形をとっていないといけないという話があった、そのとき自治会が中心となって協議会を運営している先進地の新津市萩川へ視察に行かせてもらったり来ていただいてお話を聞かせてもらったりしながらコミュニティ協議会を立ち上げました。

充実したコミュニティを作っていくには、老若男女、健常者、障がい者、皆一緒の活動を通して絆を作っていく事と、それにはリーダーが必要で

力のあるリーダーの育成がとても大切なことであると学びました。

これまでは民生委員をしていて見守る側の視点でしたが、逆の見守られる立場となると、民生委員さんが毎月寄ってくださり見守られることが、これほど嬉しいことなのかと初めて分かったのです。現職の民生委員の頃は、新潟市になり

区役所ができ、保健師さんの数も増えたことや、地域ケアでも社会福祉協議会が段々皆の地域に入り込んできてくださるようになったのでずつといろいろなところに相談しやすくなりました。また介護保険のことや地域ケアのことが、区民の皆さんに浸透してきていることは、良いことだと思います。

中学校区で色々なことが見えるようにと、保健師さんたちも頑張ってくださいと、自分の地域がどういう特徴のある地域なのかということを知るためには、すごく良い取組だと思います。

お医者さんの参加が増え24時間の地域ケアの体制というものがしっかりとできると良いと思います。——北区に移住され、学校や地域

に関わるようになったきっかけや、活動の中で感じたことはどんなことでしたか。

牧野 昭和51年の春、福島湯で稲作闘争をやっている時に、お隣の長野県松本市から主人の転勤で引越して来ました。

地域活動については引越後しばらくしてから豊栄に図書館がないことを知り、ご近所のお母さんたちと川前のお母さんたちと一緒に読書会を作って、県立図書館から3か月に1回づつ本を交換でかり受け、活動をしました。今の図書館の出来る前、豊栄公民館で夜間の本の貸出業務のボランティアを何年かしました。

3人の子どもの在学中、保育園も含め26年間PTAの役員をしていました。環境をよくしていくことが自分の子どもにも返ってくるのだという思いがあり、そのためにはやはりものを言ったほうがいいという考え方がありました。民生委員になつたのは、子どもが手を離れた40代の時で、若すぎて適任ではないと断つたのですが、引き受けることになりました。

PTAでも民生委員でも、私よりはるかに優秀な方がいらつしゃいまして、新潟県の人と比較的おとなしいですよ。だから私のような者がやることではなかったのですけれども、周りが本場に立派な方々で支えてくれたため、民生委員でいえば27年務めることができました。

——民生委員をお辞めになって今後関わっていききたいことや今後の課題について教えてください。

牧野 民生委員の視点からいえば、赤ちゃんから高齢者まで活動の範囲がとても広くなり、また個人情報の問題等でやりにくくなっている点も多く、いくつもの自治会を担当している方が多いので時間的には大変かなという思いもあります。コミュニティ協議会とか自治会と民生委員が一緒になって動く、そういう取組が出来るといいかなと思います。

私たちの頃はほとんど専業主婦で家にいる人が多く、母親が泣いたり笑ったりしながら子育てをすることに比べて我が子と共に心も育っていく。そういう育て方ができた時

代だったのですが、今は核家族で昼間働いていらつしゃる方が多いので、そのような子育てが段々できなくなっている。だから、大人が子どもたちに大勢で触れ合う機会を人工的に与えてやらないと、なかなか思いやりや心が育つことが難しいと感じています。

元々私は人が好き、子どもが好きですので、できるだけ足元のコミュニティや子どもの姿が見える所に参加させていただきたいと思っております。



民生委員、児童委員の全国会議にて
(手前右側が牧野さん)

地域医療を支える

松田内科呼吸器科クリニック院長
新潟市医師会15班班長

松田 正史

Matsuda Masafumi



豊栄市と北地区(松浜・南浜・濁川)が一緒になり北区が誕生しました。それに伴い新潟市医師会の班が再編され、旧豊栄市と北地区の班が合併しました。

「地域包括ケア」を推進するた
めには、在宅医療を担う「かかりつけ医」が不可欠です。「かかりつけ医」と介護を担当する各専門職が強固に連携することで、充実した在宅医療が実現されます。北区では2013年に開業医、北区の3カ所の地域包括支援センター、訪問看護師などが集まり、高齢者の医療・介護を考える会が発足しました。これを端緒として、北区の医療・介護福祉に携わる多職種の連携体制が歩き出し、2014年の「北区医療と介護のささえあいネット(ござれやネット)」の発足に繋がりました。「ござれやネット」は、勉強会、研修会や講演会を開催し、皆で高齢者の医療・介護、在宅医療についての知識や技術を磨き、地域に貢献すべく互いに切磋琢磨しています。

アップシステム」で在宅医療を支えています。この支援体制は、在宅医療を受ける患者さん、ご家族、かかりつけ医の強い味方となっています。この支援体制は、今後更に充実していくものと思っています。
加えて昨年豊栄病院内に「新潟市在宅医療・介護連携ステーション北」が開設され、在宅医療・介護がスムーズに実現できるよう支援しています。

近年、疾病予防・介護予防の重要性が注目されています。高齢化社会を乗り切るには、健康寿命の延伸が必要だからです。健康寿命とは、「健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間」です。健康寿命を延ばすには、健康診断・健康指導などを受け、自身の日常の健康管理に留意するだけでなく、地域の健康づくり教室・ボランティア活動などに積極的に参加し、体力・筋力・認知機能の衰えを防ぐ、介護予防への取り組みが必要です。これらの観点から、平成29年開設された早通健康福祉会館や松浜「こらぼ家」には、これからの地域の介護予防活動への更なる貢献が期待されています。

豊栄福祉交流センター「クローバー」は、この北区で、10年以上社会福祉法人として障がい福祉サービスを提供しています。豊栄市から新潟市北区となり、制度も「支援費制度」が廃止されて「障害者自立支援法」となり、障がい者に対する福祉サービスが三元化され、更に「障害者総合支援法」に変わりました。

また、通所施設の充実や訪問系サービス(居宅介護・家事援助等)及び居住系サービス(グループホーム)が増設され、まだまだ十分ではありませんが地域で暮らす障がい者にとつても、暮らしやすくなってきました。

今後は「障がいの有無にかかわらず地域で安心して暮らせる共生社会の実現」が成されようとしています。しかし、多様化する要望(ニーズ)や急速に進む高齢化にも対応していかなければなりません。今後も「地域と共に成長するクローバー」として、頑張りたいと思っていますが、当然のことながら「障がい福祉サービスや事業所で全てのニーズに対応できるわけではありません。今まで以上に福祉関係機関の連携だけでなく、「地域の一体化」により「個人の生活を支える」ことが必要だと思っています。

高齢化が急速に進むなかで、高齢者を社会全体で支える仕組みとして、平成12年4月に介護保険制度が導入されました。平成17年には地域における介護・福祉の総合的な相談窓口として、「地域包括支援センター」が創設され、医療・介護の多職種連携が推進されました。更に団塊の世代が全て後期高齢者となる「2025年問題」を踏まえて、高齢者が最期まで住み慣れた住まい・地域で安心して暮らすことができるよう、地域全体で支える仕組みとして、平成23年に「地域包括ケア」が提唱されました。

このように医療・介護が高齢化社会に向けて介護の重視に大きく舵を切ったさなかの平成19年に、旧

豊栄市と北地区(松浜・南浜・濁川)が一緒になり北区が誕生しました。それに伴い新潟市医師会の班が再編され、旧豊栄市と北地区の班が合併しました。

アップシステム」で在宅医療を支えています。この支援体制は、在宅医療を受ける患者さん、ご家族、かかりつけ医の強い味方となっています。この支援体制は、今後更に充実していくものと思っています。
加えて昨年豊栄病院内に「新潟市在宅医療・介護連携ステーション北」が開設され、在宅医療・介護がスムーズに実現できるよう支援しています。

豊栄福祉交流センター「クローバー」は、この北区で、10年以上社会福祉法人として障がい福祉サービスを提供しています。豊栄市から新潟市北区となり、制度も「支援費制度」が廃止されて「障害者自立支援法」となり、障がい者に対する福祉サービスが三元化され、更に「障害者総合支援法」に変わりました。

また、通所施設の充実や訪問系サービス(居宅介護・家事援助等)及び居住系サービス(グループホーム)が増設され、まだまだ十分ではありませんが地域で暮らす障がい者にとつても、暮らしやすくなってきました。

今後は「障がいの有無にかかわらず地域で安心して暮らせる共生社会の実現」が成されようとしています。しかし、多様化する要望(ニーズ)や急速に進む高齢化にも対応していかなければなりません。今後も「地域と共に成長するクローバー」として、頑張りたいと思っていますが、当然のことながら「障がい福祉サービスや事業所で全てのニーズに対応できるわけではありません。今まで以上に福祉関係機関の連携だけでなく、「地域の一体化」により「個人の生活を支える」ことが必要だと思っています。

児童館が目指すもの

早通児童センター館長

Kasuya Yuko
粕谷 優子



北区には児童館(児童センター)が4つあります。児童館という名前なので子どもだけしか利用できないと思っ

ている方が多いと思います。しかし児童館は子どもも含めた地域住民のものなので、18歳までを児童と捉え、それ以上の年齢の方は児童を支援する形で関わる事ができます。地域で育つ子ども達は地域の方たちに見守られ、人と関わり、安心して育つていたらよいと思えます。0歳から大人まで利用できる施設は多くありません。児童館は以前から乳幼児親子を対象に子育て支援を行なっています。子育て中のお母さんが仲間作りをし、孤立しないで子育て期間を過ごしていき、それをまた次の方たちにつないでいって欲しいと思います。児童にとっても家庭と学校以外に安心

して行くことができる場所があることは、たくさん経験ができるので大切なことです。そのような場所が多いほど幸せだと思います。地域の方が自分の経験を活かして関わり、自らもやりがいを持ち、子ども達にも喜んでもらえるような施設づくりを児童館は目指しています。色々な施設を利用して北区は子育て支援が充実している、北区に住んでいて良かったと思ってもらえるような区になつていくことを願っています。



早通児童センター

保育園併設の子育て支援センターに初めて配属されたのがおよそ10年前。保育園とは違って、親子で遊びに来る場所としてどんなことが求められているのか悩みながらのスタートでした。ちょうどその頃、私自身も親になり、遊びに来られるお母さんと同じような境遇であったこともあって「どんなふうにか？」「どんなふうにか？」「寝なを進めたらいいのか？」「寝ない、食べない子にどう接していくといいのか？」など、二倍に考えながら子育てを応援するところから始まったように思います。

こまくさ保育園には看護師や管理栄養士もおり、スタッフで話し合いをしながら親子で遊びに行くと楽しいなあと思える居場所として、北区に根づいて欲しいと願いながら運営しています。

子育て支援に携わって

こまくさ保育園 保育士
元子育て支援センター 担当者

Imai Satomi
今井 里美



利用されるお母さん方のニーズに合わせた行事計画を立て、親子で一緒に遊んで楽しい！と感じる気持ちを共有し合えるように心がけてきました。

北区は支援センターも多く、保健師さんや子育ての専門機関との連携も充実しています。ひとりで子育てに悩むことなく、お母さんたちが子育ての仲間をつくり笑顔で子どもと接することこそが、子ども達にとっても幸せな時間になるのではないかと強く思います。

私は支援センターを利用されたみなさんから、たくさん支えて頂きました。支援は一方通行ではなく支え合う事が大切だということを学ぶ場所となりました。

みなさんが笑顔で子育てができるように支援センターに足を運んでみて下さい。

早通地区のパイプ役として

早通南小学校地域教育コーディネーター
早通コミュニティデイホーム職員

Wakatsuki Noriko
若月 則子



小学校ボランティアをして

いた7年前、地域教育コーディネーターのお話がありました。初めは地域と学校のパイプ役が務まるのか不安で、職員室に入っていくのもドキドキしたものです。

ボランティア募集の呼びかけに、とても多くの保護者や地域の方が小学校に来てくださいます。登下校の見守りや、さまざまな学習支援にきめの細かいサポートをしていただいています。

子ども達には見守られていること、愛されていることを肌で感じてほしいと願っています。そして大人になった時、次の世代に繋いでいってくれたら最高です。

7月に小学校で行われた早通コミュニティ主催の防災訓練では、多くの小学生が地域の皆さんと共にAEDや消火器などの使用方法を熱心に学ぶ姿が、頼もしく



早通健康福祉会館 ひまわり食堂



まんまる食堂運営者

Yokoyama Kikue

横山 菊枝

まんまる食堂に吹く風

集まって、そこで知り合った子ども同士、あるいはボランティアと一緒に遊んだり宿題をしたりした後に、皆で「いただきます」をします。

ボランティアとして参加してくださる方々や、食材やお金を寄付してくださる見知らぬ方々が大勢おられることに驚いています。

そういう温かい風が、会場を提供してくださる照善寺に吹いて、参加した人たちが笑顔になるのだからと思っています。

一人ぼちで泣きたくなった時、まんまる食堂に来て元気になる子どもや大人が一人でもいれば幸いと思っています。

「おじいちゃんやおばあちゃんから小さな赤ちゃんまで、同じ空間で同じ食事を食べて笑える。久しぶりに感じた空気ではんわり心があたたかくなりました。八歳の娘がいつも小食なのが悩みでしたが、今日はほぼ完食でした」

「いつもは母子での夕食でしたが、今日は楽しく、ごはんが食べられませんでした」

「仕事を辞めてから家に引きこもりがちでしたが、今日はいろいろな人から刺激をもらい、良い一日でした。社会との繋がりは大事ですね。またボランティアにきます」

地域教育コーディネーターとなり十年。様々な形で地域の個人や団体の方々と繋がりを持つ中で見えてきた子ども像があります。例えば、夜遅くスーパーマーケットの駐輪場でひとり菓子パンをかじっている姿。例えば、理不尽な大人の怒りを受け、身と心を痛めて泣いている姿。

そんな子ども達がお金がなくても手作りの温かいご飯が食べられて、一瞬でも心と居場所があったらいいなと思いつつ賛同する仲間たちと共に「笑顔いっぱい・まんまる食堂」を立ち上げました。

毎回たくさんの子どまと大人が



照善寺 まんまる食堂の様子

梅津 玲子 Umezu Reiko

元葛塚小学校長／北区自治協議会委員

教育現場からみた10年

平成19年4月、新潟市が政令市としてスタートした時に、私は新潟市教育委員会に勤めておりました。政令市新潟の教育ビジョンの柱の一つに「学・社・民の融合による教育」が示されました。その具体的な方策が「地域と学校パートナーシップ事業」でした。社会の急激な進展に伴う、子どもを取り巻く環境の変化に対応して「知徳・体」ともに優れた子どもたちの教育には、学校だけではなく保護者や地域の大人たちの力が必要不可欠であるということでした。

当時各区1校、全8校のパイロット校に地域教育コーディネーターが配置され、学校と地域の人財をつなげてくれることで、教育活動や見守り活動に地域の方々が入り、人とのかかわりが深くなっていきました。北区は松浜小学校がパイロット校となり、登下校の見守り活動をはじめ、総合的な学習の時間の質的な向上に力を発揮してください、他校のモデルになりました。

あれから10年。北区の小中学校21校全部に地域教育コーディネーターが配置され、各学校の様々な活動に地域の大人の力が筋交いのように入り成果をあげています。特に総合学習においては格段の違いが現れています。子どもたちが地域の農産物や歴史・文化に興味



岡方中学校ウェルカム参観日

安心して子育て できる街へ

ワークショップ
「北区の未来予想図」
メンバー

高加茂 道代

Takakamo Michiyo



18年前私が北区に越してきてまずしたことは、当時2歳前の長女を連れて遊ぶ場所を探すことだった。すぐ近くに児童センターがあり、週2回の遊びの会に参加。そこで娘の友だちもでき、お母さんたちとも子育ての喜びや悩みを共有したり情報交換をしたり、保育士さんも常駐していたのでいろいろ相談のつてもらったりできた。

そこに集まっていたお母さん達の声からできたのが「With Step」という子ども連れで参加できるエアロビクスのサークルだった。「子どもがいると何もできない」のではなく、「子どもがいたって何とかできる」と子育てを前向きに楽しむたくましさや学ぶことができたのも、そこできたとつながりのおかげである。今は子育ての情報はすぐ手に入り随分便利になったと思う。しかし子育ての悩みを相談したり親子でコミュニケーションがとれることができる場所が北区には少ないと思う。親子で遊べる場を求めて他の区の施設まで遠征することも多い。

地元の遊び場で情報交換やつながりが持てると、子育て中の母親にとっては心強いのではないだろうか。そこに保育士や看護師などや常駐して、気軽に子どもとママや母親自身のことでも相談できる場所であればなおよいと思う。さらに病児保育の施設もあれば、共働き家庭にはほだけ安心だろう。

表情豊かな自然に囲まれた北区ののどかな雰囲気のおかげで、私の3人の娘は大変のびやかに育ってくれた。目に見えにくいのが、北区には子どもが健康やかに成長するために大切なものがある。それを生かすためにもぜひ子育て環境を充実させてほしい。

住みやすい街とは安心して子どもが育てられる街でもあると思う。北区が親子の明るい笑顔がたくさんあふれる街となるよう、心から願っている。

区制施行 10周年によせて

ワークショップ
「北区の未来予想図」
メンバー

堤 靖之

Tsutsumi Yasuyuki



この10年で子どもも大きくなり、3人の子とも達も一番上の子は来年には中学生に。それなりに問題もあつたりしますが、それらを含めて家族全体として成長を感じています。これからも色んな事を学んでいくわけですが、子ども達自身が選択できる将来の選択肢を増やすために様々な事を、と考えています。しかし家庭の事情で経済的にも時間的に制約があり、勉強もスポーツなども当時私が感じていたより、親としての苦悩が多くあると感じています。

子ども達が等しく同じ環境とはなりません。二昔前に比べ今は学校の他に図書館等が整備され、勉強できる機会が増えました。スポーツ面では色々な競技に参加できる機会が増え、その他医療福祉、商業施設も充実し、生活面では豊かな環境になりました。

病気の時も、子どもの診療についてはすぐ近くで診てもらえる環境なので、私が住む地域は非常に良いです。

残念なのは、そういった施設の多くが区民全てに等しく利用しやすいものではなく、未だJR白新線から離れた地域の方が利用しづらいこと。バス等の利用もできますが利用しやすいものではなく、冬場の不便さも含めて親の送迎の負担が大きいと思われまます。自家用車が前提の生活のため、生活しやすいところにしか人は集まらず、結果郊外に居を構える人が地域から流出、減少してしまっているのではと思います。また歩く機会の減少により健康面での不安も感じています。

野球やサッカーなどの広い場所を必要とする競技も学校のグラウンド以外で遊びの延長で気軽にできないことや、遊具の減少で子ども達が外で遊ぶ機会が減っているように感じます。出生、幼少から老後、人生の最後までフォローできるような地域が理想ですが、まずは各地域の魅力を発信し、次第に人が集まる枠組みができることを希望します。

ワークショップ「北区の未来予想図」では道路インフラの整備、人が多く集まる拠点施設の誘致など、色々な提言を挙げましたが、これからの子供達を含めた多くの人に幅広く優しい環境としてもらえるよう、これからの10年のどこかで現実に昇華されることを願っています。

ワークショップグループ作成2017.2.26